

「種の論理」における絶対無と天皇

岩井 洋子（一橋大学大学院博士課程）

はじめに

田辺の種の論理における中核である「絶対無」と天皇との関係を再考する。その際、合田正人氏の先行論文を提示し、当時の他の国家論と比較しつつ論を進めてゆく。

I 「種の論理」における「絶対無」

まず、本題に入る前提として、「種の論理」と「絶対無」について論ずる必要がある。田辺元は中間項に「種」という民族共同体を配置し、個・種・国家の三面関係から国家論を構想した。個と種の対立、あるいは種内部の対立があり、これらを止揚し類たる国家に至るとするのが、種の論理の骨格である。田辺はこの論を絶対媒介の論理で説明する。即ち、全てのものは何かに否定的に媒介され存在するが、その関係を弁証法的に止揚することで種は類に至るとする。つまり、「個」は「種」に否定的に対立しているが、これを克服し自立することで真の個となる。一方、「種」の側も、「個」による「種」の否定によって、種限定性を超え、「個」の分立を可能（許容）とする類の普遍化をなす。これは閉じられた社会を開かれた社会へと転換することである。そこでの国家は、種と個を否定的に媒介することで種と個の共存共立―「個の自由と種の統一の否定的統一」―をなす統合機構としてとらえられている。この弁証法は絶対弁証法と呼ばれるが、ヘーゲルの観念的弁証法とマルクスの唯物論的弁証法を総合したものであると田辺は考える。ここでは、マルクスが重視した実践が強調されるが、反面、マルクスの唯物論的史観は退けられ、個の主体性が問題とされている。この種の論理において、重要な観念とされるのが「絶対無」である。これは否定的作用であり、この否定作用によって、統一体ができると田辺は考える。つまり、それは文字通りに「無」ではなく、「有」を否定する作用である。これを田辺は「絶対無は絶対否定の作用の外にない」と述べている。「絶対無」を有ではなく、存在性の絶えざる否定（「不断の更改」）というはたらき、ないし作用としてとらえることは、あらゆる制度を相対化し、新たな地平で個を統一することを意味する。

II 「種の論理」における天皇

田辺は「種の論理」の中で、天皇について全く触れていない。それは、当時の状況からして、自己が構想する天皇観を提示することの困難性を田辺が感じたからにほかならない。そこで田辺の「種の論理」の核である「絶対無」が、「天皇」と如何なる関係に立つのかが問われる必要がある。戦後間もなく、田辺は天皇を絶対無と関連させ、「無の象徴」であり、統一の中心と主張した。そして、こうした理解は戦中からの田辺の天皇理解として一貫したものであったと考えられる。この田辺の天皇観と絶対無の関係性を明確にすることが報告の課題である。この点、合田正人氏は田辺が戦前、天皇を絶対無、戦後は絶対無の象徴と捉えていたと主張する。換言すると、戦前、「天皇」は一般意志の体现者であり、戦後は「一般意志」の「象徴」となった。「天皇」の存在を決めるのは「一般意志」であり、この意志は「無」である。かかる見解は傾聴に値するものであり、天皇を「無化」する点で私見と同旨である。ただ、絶対無とは個の覚醒と私心の否定という作用を指すのであって、この論には飛躍がみられる。

III 当時の国家論との比較

戦前の「君民一体」を忠実に弁証したのは、北一輝、筧克彦であった。こうした国家論を補助線として比較するのは、田辺の論を特徴付けるのに有用であろう。

北一輝は「家長国家」から「公民国家」へ移行するという進化論の立場に立ち、当時主流となっていた「国体論」は、「復古主義」であると批判する。そして、北は純正社会主義を提示して、経済的平等の実現を企図する。彼にとって、維新革命（明治維新）は、民主主義が社会貴族を打破したものととらえた。つまり、北は特権者たる天皇と国民（共に国家機関）とを統治の主体とした国家論を構想したのである。

筧克彦は国家を普遍我と規定し、各国民にはこの普遍我が宿とする一種の汎神論に依拠する。そして、職業を参入経路として、全国民は国家機関として、国家建設に励むことが役割とされる。また、各国民は「仲間関係」にあるが、「一心同体」の下に統合され、歴史の形成に携わることが予定されている。ここで、筧は「表現哲理」という観念を用いて、各国民を国家の表現者と位置付ける。そして、天皇は「全き表現者」であり、各個の範型であるとされる。

三者の論は穂積八束らの天皇主権、臣民服従型の国体国家論とは異なる。平等な国民を措定し、その国民が道義的实践によって国家を建設する、それが彼らの論の特徴である。

ただ、北、筧の論は「民族」の捉え方において独特である。北はアジア主義の観点に立ち、列強の支配からアジアを解放に導く、そうした使命が日本民族にはあると確信していた。筧は日本民族の優等なることを強調し、その国家論は民族主義的色彩が濃厚となる。臣民には皇祖・皇宗に連なる普遍我が内在しており、その覚醒によって一心同体の下、国家建設に励む。そして、全世界の中心には日本があり、この精神を拡張してゆくののが日本の役割であるとした。

当時のこうした民族主義的国家に対するアンチテーゼが田辺の論である。田辺にとって、民族主義、国家主義は「無媒介なる直接主義に依る特殊の普遍化、相対の絶対化」であり、絶対媒介の立場から排斥しなければならないものである。そこで、多元的な伝統的共同体を否定的な「私」ととらえ、権力の単一性である国家を普遍（公）ととらえる。個人は本来の自己を取戻すべく、種的社會を普遍的社會（国家）に転換する。つまり、民族主義の呪縛から個人を解き放つ。これが田辺の主意である。

IV 「絶対無」と天皇

以上のような民族の捉え方の相違が天皇論に現れることになる。北にとって天皇は国家の最高機関であり、筧にとっては「全き表現人」であった。しかし、田辺にとって天皇は種の論理の核たる絶対無との関係に於いて捉えられることになる。「絶対無」とははたらきである。それは、具体的には個の我執を否定する道義的实践を言う。このはたらきによって、あるべき国家が建設される、これが田辺の見立てである。天皇はこれを投影する媒体、比喩的に言えば鏡であろう。つまり、天皇は絶対無と間接的に関係するものの、それは合田氏が主張するように絶対無そのものではない。田辺は国家を支えるものに「信」を挙げるが、それは国民自身が実践によって国家を形成しているという「確信」を意味する。そして、その信の証が天皇の存在でもある。かくて、田辺にとって天皇とは「絶対無」の鏡であり、象徴天皇制が採れた戦後は「絶対無」を映し出す媒体、その象徴とされるのである。